

第2 特集

ブッダに学ぶ生老病死 — 臨床と仏教 —

仏教は“弱さ”といかに向き合ってきたのか

「もう、できることはないのですか——」

家族の震える声、ベッドに横たわる患者のまなざし。言葉が見つからず、重い無力感と迷いが押し寄せる。臨床現場には、医学的判断だけでは解決できない問題が少なくありません。こうした“弱さ”と、私たちはどう向き合えばよいのでしょうか。

仏教は、お釈迦さまが「死」という避けがたい事実と直面したことに始まりました。以来、寺院や僧侶は、生老病死にまつわる智慧や死生観を受け継いできました。その視点は、弱さや限界、避けられない現実を包み込み、ケアを育み支える道を示します。

一方、日本では厳格な政教分離のもと、医療と宗教は長らく距離を置いてきました。医師にとって、宗教は「触れにくい領域」であったことも事実です。しかし、東日本大震災を経て、宗教者による臨床的知見が再び注目を集めています。

本特集では、国内外で活動する仏教関係者が、臨床現場で役に立つ思想や実践例を紹介します。日々の診療で出会う“弱さ”に向き合うための、新しい視点とヒントを見つけていただければ幸いです。

編集幹事

淑徳大学 アジア国際社会福祉研究所／
アジア仏教社会福祉学術交流センター

井川裕覚